

# 地域の間としての公共図書館が関与者にもたらす自己変容プロセスの構造化

## —グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた武雄市図書館の分析—

Structured the process of self-transformation in the public library as place

—Grounded theory study of Takeo city Library—

山崎 茜・保井 俊之・前野 隆司（慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科）

Akane Yamasaki, Toshiyuki Yasui, Takashi Maeno

(Graduate School of System Design and Management, Keio University)

**要旨** 本研究では、公共図書館が地域の間(ba)として利用者にどのような変容をもたらすのかを可視化し構造化する。分析フィールドとして、地域志向の図書館の先駆例として注目を集める佐賀県武雄市図書館を選び、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)により分析した。その結果、関与者には、外部刺激により自立行動が促され、オーナーシップを持った行動すなわち、わがこととなる状況での試行錯誤による成長が実感され、自己と活動の広がり及び地域への利他的意識が醸成され、意識変容が生じていることを明らかにした。また、地域の間としての武雄市図書館の機能は、外部刺激による個人の動機づけ、外とつながる場、活動の場、自由さ及び選択できる居場所の提供、並びに他者から見られる劇場型空間であることを示した。

**キーワード** 場、意識変容、公共図書館、グラウンデッド・セオリー・アプローチ、場としての図書館

### 1. 研究の背景と目的

2000年代に入り人口減少と過疎により、地方自治体等が高度経済成長期にその多くを建設した地域の公共図書館の存続意義が問われている[1]。電子書籍化に伴う紙媒体不要論、図書館利用者の減少、地方財政の窮迫による人件費及び運営経費節減の実現等が喫緊の課題となっている[2][3]。これまでのような紙媒体による受け身の情報取得のための施設としての地域の公共図書館の機能には見直しの声が上がリ、老朽化が進む図書館の再編と新たなニーズへの対応が急務とされている[4]。全国 3,330館の公立図書館のうち約 6割は築 30年以上と老朽化が進み[5]、公立図書館のサステナブルかつ新たなあり方の設計が模索されている。

本研究の目的は、上記の問題意識に立ち、1(2)で詳述するように新たな図書館の先駆的な試みとして知られる武雄市図書館が地域の「場(ba)」[6]として、利用者にどのような変容をもたらすのかを可視化し構造化するものである。

「場としての図書館 (library as place)」論は2000年代後半から急速に注目されてきた図書館研究であり、2(2)に詳述する。これまでの日本の図書館は施設として資料提供等に資する機能性に重きが置かれ[7]、主として情報、教育、並びに学習が研究課題とされてきた[8]。他

方、近年の図書館研究は学際的かつ統合的なアプローチにシフトしており、カルチュラル・スタディーズ、エスノグラフィ、地理学の場所研究理論、社会学及び政治学の場所の概念等が援用されるようになり、場としての図書館の概念に注目が集まっている[8]。

本研究の「場(ba)」(以下、場)の定義は、知識創造論の立場に立つ野中ら[6]の場の定義を地域活性化論の文脈で再定義した坂倉ら[9]による「地域の様々なステークホルダーの協創、協働を促し『地域の知』を創造するプラットフォーム」(p.25)とする。図書館に期待される役割は情報提供及び利用者の知識蓄積から、場としての図書館すなわち場の参加者に自己変容を促す場へと変化している。また地域の場は、地域住民の間の信頼関係や帰属意識を醸成する場所として近年注目されている[10]。

分析の手法はグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA) [11][12]を用いる。演繹的かつ定量的な分析方法を用いず、帰納的かつ質的な調査方法である GTA を用いる理由は、本研究が分析対象とする場の参加者の自己変容は個人レベルのものであり、会話や五感を通じたコミュニケーションで成立する個人の変容の可視化には、演繹的かつ定量的な分析方法ではなく、人間行為の会話等の相互作用に着目し、個々の質的データから概念を grounded に汲み上げ、概念間の関係を捉えながら対象

の内的変容プロセスを可視化する手法[11][12]であるGTAが適しているからである。

## (2) 研究対象の概要

本研究の分析フィールドとして、佐賀県武雄市図書館・歴史資料館（以下、武雄市図書館）を選んだ。同図書館は図書館の新たなあり方が問われるようになった2000年代に、地域の場としての図書館として本格的に立ち現れた日本における分水嶺的事例だからである[7][13][14][15][16]。

武雄市図書館は2013年に経費合理化と地域活性化のロールモデルを目指し、民間ノウハウを活用した改修を行った。改修後、提供サービスの質は365日年中無休で毎日9時から21時までの開館となる等向上した(表1)。

表1 武雄市図書館の改修前後の比較

	改修前	改修後	増加率
運営	直営	CCC	-
管理運営費	1.2億円	1.1億円	90%
開館時間	年35日休館 10時-18時	365日開館 9時-21時	165%
蔵書数	開架10万冊 蔵書18万冊	開架20万冊	200% (開架冊数)
席数	187席	279席	149%
面積	300坪	560坪	187%

(出所: 武雄市及びCCC広報資料参照に筆者作成)

武雄市図書館は2000年に図書館と武雄蘭学を常設展示する歴史資料館の併設館として建築された。しかし開館時間の延長にもかかわらず、利用者は増えなかった。そこで武雄市役所は民間活力の活用による365日開館を目指し[17]、市民図書館の新たなあり方のイメージにカルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社(以下CCC)が経営する代官山蔦屋書店が合致したとして、同社に連携を求め、武雄市図書館を改修することとなった。同図書館は改修後2013年4月にリニューアル開館し、運営方式は武雄市の直営から指定管理者制度によるCCCによる管理運営へ移行した(表2)。

図書館サービスの提供及び空間設計にはCCCが書店経営で培った民間ノウハウが活用され、外資系コーヒーチェーン店、文具書籍の販売並びにCD及びDVDレンタルを行う書店が併設された。このような図書館内の自主事業には行政財産の目的外使用が適用されている。2017年には隣接の敷地にこども図書館が新たに開館し、同図書館内には地域ブランドのパンケーキ店が自主事業として併設された。

表2 武雄市図書館改修整備の経緯

2000年10月	武雄市図書館・歴史資料館 開館
2006年	金曜日の開館時間1時間延長・祝日開館の実施等 開館時間を延ばす取り組み
2012年5月	武雄市とCCCの武雄市立図書館の企画・運営 に関する提携基本合意発表
2012年6月	武雄市議会において指定管理者制度を導入する 条例改正案が可決
2012年6月	武雄市臨時議会において CCCを指定管理者として指定する議案が可決
2012年8月	図書館・歴史資料館に関する市民アンケート
2012年11月～ 2013年3月	改修工事のため閉館
2013年4月	武雄市図書館・歴史資料館 リニューアル開館 スターバックスコーヒー、蔦屋書店併設
2017年10月	武雄市こども図書館 開館 九州パンケーキ併設。本館のCD/DVDレンタルスペース 閉鎖

(出所: 武雄市公表資料参照に筆者作成)

武雄市図書館の改修後(2013年)の利用者数は改修前(2011年)比で360%となる92万人、貸出冊数は154.8%に増加した[18]。この結果、武雄市図書館は地域活性化の場として注目を集めることとなった。

## 2. 先行研究および本研究の位置づけ

### (1) 場の理論

場の理論は、組織マネジメントの原理としてナレッジマネジメントの分野を中心に発展した。野中ら[6]は場を「知識創造のための有機的土壌」(p.53)と呼び、場への「参加者の関係性が立ち現れ」「知識創造の礎として作用する共有スペース」(p.40)であり、その関係性は物理的、ヴァーチャル、精神的なものの組み合わせから成るとしている。

場の重要性の認識は地域活性化論においても近年注目され、多様なステークホルダーの関係性構築並びに協働・協創の基盤として、多世代の共存、交流及び協創を創出する多様な主体間のつながりを生み出すオープンな場の意義が認められている[19]。坂倉[10]は地域の場の成立について、空間という物理特性だけではなく、参加者がその空間に持つ感情だけでなく、空間と参加者の相互関係によってはじめて成立することを示した。したがって、地域の図書館研究についても、これまでのような施設の機能性のみならず、地域活性化の場としての特徴に着目し、空間と利用者相互にどのような関係性を発生させるかという地域の知的創造的プラットフォームとしての観点の追求が待たれている。

### (2) 場としての図書館論

図書館情報学の中心的な研究課題はこれまで、情報、教育及び学習機会を図書館が利用者にいかに効率的に提供するかにあった[8]。1970年代までの公共図書館はいわば貸出し中心主義であり、施設のハード面ではモダン

ズムによる機能的な図書館建築が多く志向された[7]。80年代頃からは高度情報化社会の到来を背景に、レファレンスの強化等の情報提供の質と多様さが追求された。

場としての図書館論は90年代に、図書館における知識習得のリソースの電子媒体化である電子書籍化へのアンチテーゼ[20]として生まれた。2000年代に発生したGoogle Library Projectが、同理論の発展を促した。例えば、Bushman *et al.*[21]は、場としての図書館を抽象的な場ではなく、コミュニティの場及び学習と学術活動の場の物理的な場所として捉えている。他方でAntell *et al.*[22]は、物理的な場としての図書館の目に見えない側面に価値を置き、インターネット時代へのアンチテーゼとして電子的経験に欠落している、聖域という感覚、知的な精神状態、知識の精神的感覚、並びにカプセル化された隔絶の各カテゴリーに注目し、図書館という場が物理的場所を超越する可能性を示唆した。

日本では久野[8][23]がサードプレイス論と社会関係資本論の立場から、学校図書館にサードプレイスの機能があることを示した。根本[7]は「図書館が単なる資料提供の機関ではなくコミュニティの中で過去、現在、未来を繋ぐ場所に変貌している」(p.59)としている。具体的には、90年代から大学図書館を中心にアクティブ・ラーニングやラーニングコモンズといった主体的学びの新たな手法を支援する機能を取り入れる動きが始まっている[24]。また2010年代には、地域の課題意識を共有し自治意識を醸成させるための住民ネットワークの支援も地域図書館の使命とする考え方が生まれた[25]。

### (3) 本研究の位置づけ

上記の先行研究で明らかのように、地域の公共図書館が地域の協創や多様な主体間のつながりを生み出す場だとすれば、地域の公共図書館は場である図書館の利用者に、何らかの変容を引き起こしているはずである。しかしこれまでの場の研究においては場の成立条件の特定並びにその設計方法を提案するものが多く[6][9][26]、参加者にどのような自己変容が発生したのかを可視化し構造化する研究はいまだ萌芽段階にある。

このような問題意識に立ち、本研究はまず、場としての図書館の中でどの様な自己変容が利用者に起きるのかを明らかにする。さらに分析の手法としても、GTAを学術図書館や学校図書館の児童生徒とその周辺を対象に用いた研究[27][28]はあるものの、地域の公共図書館研究にGTAを用いるという新たなアプローチを試みる。

また本研究のフィールドである武雄市図書館については、運営手法及び官民連携手法に着目した先行研究がな

されている。具体的には選書及び従来の分類方法を使用しない独自の分類方法[29][30]、指定管理者制度や運営方法に関するもの[24][31]、官民協働による社会的価値[32]等CCCによる従来の指定管理者による図書館運営の枠を超えた手法の独自性に関するものである。他方でその効果について実証的検証はこれからである。本研究は改修から5年経過し、複数の独自手法による新たな図書館がどのように地域に受容され影響を与えたか、受容者側からの視点に着目し図書館という場による個人の自己変容プロセスを分析する点が、従来の研究とは異なる特徴である。

### 3. 分析方法

本研究のフレームワークを図1に示す。手順としては、まず場の関与者の意識変容がいかに行われたか、そのプロセスに武雄図書館がどのように寄与していたかのデータを、半構造化インタビューにより取得し、そのデータをGTA[11][12]を用いて分析し可視化及び構造化する。

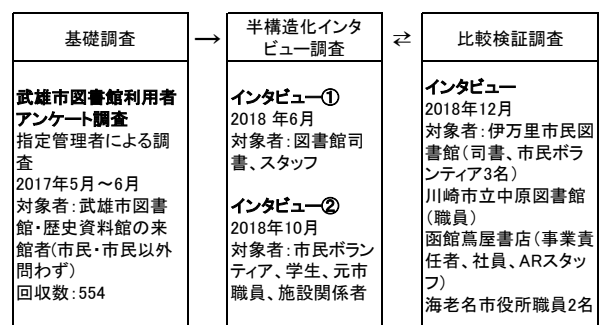


図1 研究のフレームワーク

#### (1) 本研究の予備調査及びGTAの概要

まず2013年以降武雄市図書館の指定管理者によって毎年行われた利用者アンケートを参照し、2017年度利用者アンケート調査結果(n=554)から図書館利用者の45.8%に生活の変化があること、64.8%が武雄市の変化を認知していることを確認した。そこから自分自身、武雄市並びに図書館のそれぞれがリニューアルによってどのように変化したか、その3要素の関係性を明らかにすることを目的としてインタビュー項目を設定しデータ収集を行った。収集したデータに対し、GTAによる分析を後述する手順に従って行った。分析に際して他の図書館、類似施設関係者にも同様の質問を行い、比較検証した。

#### (2) データ収集方法

武雄市図書館を通じて事前にアポイントを取った数名に対して半構造化インタビューを行なった。インタビューは録音し、逐語録を作成した。インタビューの概要を

表3に示す。なお、インタビュー項目は慶應大学大学院SDM 研究科倫理委員会の承諾を得るとともにインタビュー対象者には事前に承諾を得ている。

表3 インタビューの概要

期間	2018年6月・10月
場所	武雄市図書館、市役所
方法	調査協力者と調査者(=筆者) 1対1、もしくは1対2(調査協力者)の 個別インタビュー
回数	調査協力者1名につき1回~2回
時間	調査協力者1名につき1時間、 2名の場合は合わせて2時間

(出所:筆者作成)

### (3) 分析対象者

分析対象者の選定基準として、武雄市図書館に関わる主要ステークホルダーのうち、武雄市図書館改修プロジェクトを受容的立場として関与した者として同図書館に関与ないしは利用経験がある市民を選んだ。その結果、武雄市図書館司書2名、武雄市図書館に併設する葛屋書店の異なる業務で働く地元雇用スタッフ3名、改修前から図書館ボランティアを行う市民2名、元市役所職員1名、歴史資料館関係者1名、並びに利用者の高校生1名の10名を選定し、インタビューを行なった(表4)。

表4 分析対象者一覧

符合	関係性	性別	年代	居住地
A	スタッフ	男性	20代	市外
B	司書	女性	30代	市外
C	ボランティア	女性	60代	武雄市
D	ボランティア	女性	60代	武雄市
E	学生	男性	10代	武雄市
F	司書	女性	30代	武雄市
G	スタッフ	女性	50代	市外
H	施設関係者	男性	60代	市外
I	スタッフ	女性	30代	武雄市
J	元役所職員	男性	60代	武雄市

(出所:筆者作成)

### (4) 本論文におけるGTAの分析手順

地域活性化分野におけるGTA研究[34]を参照し、インタビューを逐語録に起こしたテキストをもとに分析対象者ごとに戈木[12]が示す手順に従い分析を行った。

なお、本研究は図書館の運営スタッフを中心に受容的立場で改修プロジェクトに関与した者のほぼすべてをフィールドワーク及び半構造化インタビューの対象としており、武雄市図書館のステークホルダーの洗い出しとし

ては理論的飽和に至ると考え得る十分なサンプリングを行っている。

## 4. 分析の結果

GTAによって導かれた関与者の意識変容のプロセスと図書館及び地域がどのように関与したのか示した全体図を図2に示す。これは分析手順で述べたカテゴリ間の相互関係を分析した結果得られたものである。

本文中の【】は中心となるカテゴリ、<>はカテゴリ名、()はサブカテゴリ、分析対象者は(A~J)の符号で表記する。

### (1) 統合されたストーリーライン

図書館の場の関与者個人は、以前は<制約を感じ><未来や変化に対する不安、恐れ>、守られていた仕事から<シエルトーの中の自分>であった。図書館のリニューアルの決定後から<外の世界>から地域に対する多種多様な外部意見や<歴史資料館の喪失><図書館の根本的変化>から<地域が二分される>思いを感じた。一方<外の世界>で<地域には無いもの>を知り、図書館を通じて<外に出るきっかけ>を得ることで【わがこととなる状況】に置かれ、<外部刺激による動機づけ>から<自分でなんとかしないといけない>という思いになる。動機づけされた個人は地域内で【自立行動と自分なりの試行錯誤】を行うようになる。<自分で考え><やりたいことをやり><自分なりの試行錯誤>の中で、図書館で<外とつながるきっかけ>を得て、外の世界と<運命的なすごいものにつながる>経験をし、<未知なるものを知る楽しさ>を得る。<自分なりの試行錯誤>をしながら様々な自分だけで行動することの<困難を知る>。そこで、<劇場型>である(図書館がステージ)となり図書館の中で活動が見られ、<場を使う>ことで(発信の場所)とし、(見守る・見守られる)ようなく人とのつながりの場や地域の<つながりが困難を克服する自分を可能にする>存在となり、困難なことも<良い方向に転がり始める>様になって、<大人が変化した>。地域に対しても<行動が広がり>、<枠や境界を越える>活動を通して<自分が広がる>ように感じ、図書館を通じて(武雄市の関心が増え)(武雄は世の中の大きな流れの中にある)と<外の世界とつながり>、館内や外の世界から<見られる>ことで(自信になり)、【自己の広がり】を得た。このような経験から自分自身の<成長や変化を感じ>、<自分が豊かになる>意識や、地域に対して(地元と図書館を根付かせたい)(図書館を残したい)(10代の人に開いてほしい)(どうしたいより、需要に応える)といった<利他的な意識>を持ち、地域に対して(まちが明るくなる)<地域の活性>を

感じ、＜武雄を誇りに思う＞気持ちと地域の人々＜変化を受け入れる土壌＞の空気ができたと感じている。

## (2) 各カテゴリーの概念について

場の関与者個人の意識変容のプロセスは次の4段階のカテゴリーで形成された。以下は各概念を支持する具体例の一部である。

### ① わがこととなる状況

地域内にいた自分自身が外に出る、もしくは図書館内に入ってきた外からの存在と交わる＜外部刺激による動機付け＞から＜自分でなんとかしないとイケない＞状況になる。外の概念はインタビューから導出された言葉で、外の対象は個人の行動範囲によって異なる。例えば、高校生ならば福岡や九州、社会人は東京、家庭にいる女性は社会や働く女性等である。個人の【わがこととなる状況】の多くは物理的に地域から外に出た時に認識し、使命感を感じている。しかし、必ずしも物理的に外に出る必要はなく、地域もしくは個人に外の世界が交わる場合も同様に【わがこととなる状況】が見られる。自分自身が外に出ない人は、図書館の変化からこれまで見たことのない人や民間企業から来た積極的な人がある状況により外と接することになり（馴染めない、馴染むことに時間がかかる）と感じていた。

#### a. <外部刺激による動機づけ>

- Facebook はじめ SNS も含めて、いろんな情報が入ってくるって思うけども、要するに生の感覚っていうか、その感覚っていうのは、やっぱりその人と会ったりとか、その場で話を聞いたりとかじゃないと出ないので、その刺激はやっぱり図書館で味わえるようになったっていうのはすごいとこですね (J)
- そのときに取り組みを聞いて、「世の中こんな楽しそうな取り組みがあるんだな」と思い挑戦しようと思った (E)
- 販売のスタッフの人もいっぱい入ってきたから。これまで会ったことのないような人達とも仕事ができるようになったし。この人達は結構ぐいぐい来る方達なんだなと。今までの図書館とはまったく違う人種が入ってきたぐらいの感覚 (B)

#### b. <自分でなんとかしないとイケない>

- 環境が変わったことによって、自然にこのままじゃいけないって生まれてきたのかもしれない (F)
- 受動的な風に受ける柳のようにぶらぶらした感じ。何か一つを自分達でやってやろうという感じがなかった。(E)

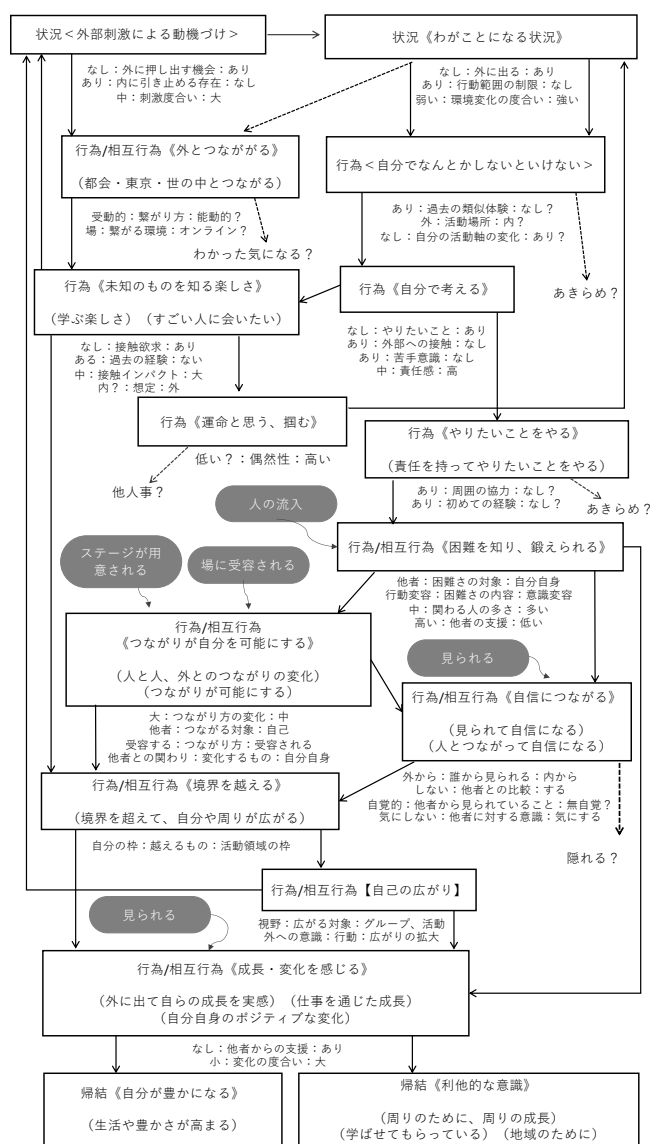


図2 【成長・変化を感じる】カテゴリー関連図 (出所 筆者作成)

### ② 自立行動と自分なりの試行錯誤

外に出た個人は、自分自身では行ったことのないことに自分で考えて挑戦してみるという行動や、外で得た経験を地域内に帰ってきて自分で行ってみようとする行動が現れた。一方、外に出ず内部で刺激を得た者は、図書館が変化する中で、自分なりにその範囲の中でやってみようという行動をとっていた。＜やりたいことや表現したいという思いは元々持っていた＞が、以前は＜決められた事を行う＞仕事に就いていたこと等、制限、行動範囲の狭さから出来ずにいたことが明らかになった。外で刺激を得た者は、地域内で得た情報からも刺激され、実際に会いたい、話したいという欲求を持ち実行をしていた。実際に会うことで＜運命を感じる＞体験を口にしていた。

#### a. <自分で考える>

- 児童書わかる人がいなくて、(筆者追記:外に出た時が)

一番考えた時期だったかもしれない。(F)

b.<やりたいことをやる>

- ・次の年にリーダー塾で、図書館で講演会を（筆者追記：自分で開催することが）できたりした (E)
- ・自分のやりたいことが形になって、それに参加してくれる人がいて、なんかそれって今まで考えつかなかったなって。(F)

c.<未知のものを知る楽しさ>

- ・今までやらなかったことに興味が出て、繋がってより広がった。(F)

d.<運命と思う、掴む>

- ・ちょうど選考中の時にカンブリア宮殿を見ていてその時はいらっしゃる先生は決まっていなかった。(中略) 実際にいらっしゃると聞いてお話したいなって。ばったりと出くわして。(中略) 運命的な出会いで、それがなかったらこうやって図書館ともつながりがなかったのでよかった。(E)

### ③ 自立行動の限界と突破

実際に自分が行動する中で困難にあう経験をしている。挫折には至らないが、環境が整わずできない、いきなり行動するとなると抵抗がある等の状況に直面していた。困難な状況を突破したきっかけは、自分だけが頑張るのではなく、周りからの助けを得て、前向きに考えた結果<いい方向に転がる>ようになった。<挑戦を支えるつながり>は多様であり、(社会・世の中とのつながり)、(比較しない、気にしない)(自分の変わらないもの)を意識する自分自身とのつながり、仲間とのつながり、図書館の場を通して(見られること)など、地域、図書館という場が影響して<つながりが自分を可能にした>という感覚を得ている。

a.<困難を知り、鍛えられる>

- ・人を集めることはものすごく難しい。最初イベントをやるときに、募集人数を50人としたんですけど3人しか集まらなかった。(E)
- ・民間にいたことがなかったから。その分責任があるから、それは大変だなって思った。(中略) 頼られることも多くて、それがなんかすごいきっかけ。(F)

b.<繋がりが自分を可能にする>

- ・いい具合に図書館の変化と一緒にいい具合に私たちのグループもいい方に変化した。(D)
- ・仲間がいるからできる。グループが違ってもしっかり一緒におはなし会武雄としている人達、(中略) お互いに助けあったりできるような関係に。やっぱりそういうつながりができて、なんかこれからもやれるかなって(C)

・信頼されていると感じる(F)

・もっと自分を出して良いんだという自己肯定感みたなというのがあって。それが一番大きいかなと思う(I)

### ④ 自己の広がり

多様なつながりに支援されて困難や新たなステージを突破しく自己の広がり>が見られた。要素が2つ組み合わせると価値観や活動が広がるという声がある。例えば、いつものグループ内ではなく、他グループの個人と個人の2人で活動することで広がりとなった。また、自分自身が2つの活動をしていると地域内での広がりが大きくなるという例もあった。どの事例でも共通して元の活動<境界を越えて>にいるという特徴がある。成長や変化の認識は自分自身のみならず家族等周囲から変化を指摘されている。さらに人とのつながりや他者からの言葉など他者の意識を認識することで自信を得ていた。

a.<境界を超える>

- ・自分がそうやって内にこもっていたのが、そうやってそこきっかけになって開いていく(中略) ローカルルールみたいなのが徐々に取っ払われて来ているのかな。図書館以外でも徐々に溶けている。境界線が徐々に溶けている。図書館をきっかけに入れている (I)
- ・二つのグループが重なってつながり自分がこれとこれをやっているとか、2つがあることは広がる(D)

b.<成長・変化を感じる>

- ・図書館は仕事を通じて成長をしていける場所 (A)
- ・家族にも変わったねって言われる。周りの人からも言われます。(D)
- ・成長していく姿がすごい嬉しい。すごいなって。●●さんすごいよね。●●に行くと成長したなって思う (F)

c.<自信につながる>

- ・この5年間を耐えられたから、どこにいても大丈夫な気がします。(B)
- ・こういう風に人と繋がったら自分がいいと思っていることを伝えられるんだということを、橋渡しになるツールをもらったというか、自信をもらった。(I)

### (3) GTA から抽出された場の特徴の他館との比較

武雄市図書館が備えている場の特徴を、他のケースでも同様に備えているか比較検証行った(表5)。現地で施設関係者(図1)に、利用者の図書館利用の仕方、開館後もしくは移転後の図書館と地域の変化、図書館と地域の関係性について質問を行った。また、空間的特徴については筆者が観察を行なった。結果、特徴的な空間要素は機

能がシームレスに重なりあい、利用者の活動がオープンになっている点である。すなわち、見る・見られるという見守りの関係、見られることによる自身の向上と質の継続性、並びに利用者にとって自由でいられる選択可能な環境があった。さらに、地域住民の増加や利用可能地域の拡大によって外部から人の流入がある場合には若い人の参加が見られ、組織や場を超えた活動の広がりが見られた。業務委託による民間運営を取り入れた際、業務上の分離がある場合は、個人の成長に際立った寄与は見られない。これらより、武雄市図書館の特有の特徴は市民の場でありながら観光客やスタッフ等の外からの他者を受入れ、混在している点にある。

### 5. 考察

武雄市図書館が、場としての図書館に変容したことによる、場の関与者個人の意識変容プロセスと、それに影響をもたらす図書館と地域の関係性について分析の結果を図3に示した。地域活性化に寄与する地域の場としての図書館の特性は次の4点である。

第一に、武雄市図書館が関与者個人の自らの課題やかわがこととなる状況>となる<きっかけとなる>ことである。図書館に<学習意欲のある人が集>り、<積極的な人との協働>によって、刺激を受け<新しいことを始める場>になっていた。しかし、この図書館の変化にはポジティブな側面だけでなく、変化に伴う戸惑いや痛みといった<変化に対するネガティブな反応>もあることを後述する。

第二に、図書館が自分の外との関係性をつくる<外とつながる場>であることである。<外から人が来る><外から知られる><武雄が外とつながる>と、武雄とい

う地域が都会から見過ごされる存在ではなく、(武雄は世の中の大きな流れの中に入っている) 存在と認識したことが個人の意識に影響を与えている。

第三に、多様な個人を受容する、場としての図書館の在り方である。個人の挑戦や行動を支えた図書館の特徴として<人と人のつながり><人が集い、交わる、拠点><自由・選択できる居場所><場を使う>要素がある。坂倉が示す空間と参加者の相互関与によって成立する地域の居場所[10]は人とのつながりを感じられる親密さや参加者が主体的に関わることができる柔軟さが場に集う人々によって生成されるとしており、その性質を帯びた場であると考えられる。

第四に、図書館という場を通して他者から<見られる劇場型空間>となったことである。館内は<若い人で溢れる><多様な人が来る><活発な人がくる>ようになり、<空気感、開放感>を感じ、活動を行う人にとって(図書館がステージとなる) ような、<空間に合わせた自分になる>効果が見られた。中井ら[35]は場としての図書館に、人ごみに紛れることで匿名性を確保し、落ち着きを求めて「都市的なにぎわい空間」を求め一定数の存在があることを利用者の行動から明らかにしている。武雄市図書館は書店及びカフェが図書館空間内にシームレスに融合していることから都市的なにぎわい空間の要素が他の公共図書館と比較して強く出ている。図書館の居場所的な場所性に加え、都市的な居場所によって図書館に対する心理的ハードルが低くなり受け入れられたと感じられている。故に、これまで利用していなかった潜在的な図書館利用者層を活性化させ、外部から多くの利用者が流入した結果、多様な人が集い、交流することとなったと考えられる。

表5 他館比較のインタビュー結果

検証項目	運営手法・属性	空間的特徴 (筆者の観察結果)	個人の意識と変化	図書館/書店の性質	地域との関わり	地域外に対する意識
GTAから抽出されたカテゴリー		<見られる劇場型空間> <自由・選択可能な場所> <場を使う>	<境界を超える> <成長・変化を感じる> <自信につながる> <自分が豊かになる>	<場から受ける刺激> <外と繋がるきっかけとなる場所>	<繋がりが自分を可能にする> <行動が広がる> <利他的な意識> <地域に対する誇り>	<地域にはないもの> <運命的なすこいものつながり> <注目される/見られる> <意識する>
武雄市図書館 (佐賀県)	指定管理 (CCC)	・カフェ及び書店が図書館とシームレス空間 ・PC専用席等の機能特化席はなく、iPadを活用したフリーアドレス ・イベントや講座をカフェ空間内で実施 ・上部空間から見わたせる構造 ・子どもスペースは別館に分離 ・子供のお話は階段状のオープン空間	・他者の学びの姿が見ることによる刺激 ・外から来た民間事業者から刺激を得て自分自身で試行錯誤している ・外に出て行き、自らの成長とする ・変化を受容し、変化を起こすことを取り組む	・異なる業種が混在する労働環境 ・異なるバックグラウンドのスタッフとの協働 ・図書館をきっかけに地域の外に出ていく	・高校生が外から経営者を呼び図書館で講演会を行う ・地域の他の活動に活動内容が広がる ・他の団体と繋がりが活動する ・武雄を誇りに思う	・県外、海外の観光客が来館し、観光客を図書館に受け入れる ・メディアから注目され、見られている ・外部から見られていることを意識し、きちんとすることを意識する ・外に出ると外部の人が武雄市図書館を知っている
伊万里市民図書館 (佐賀県)	直営	・喫茶エリアは入り口付近で独立しており、図書館空間との混在はない ・機能は細分化され各空間に囲いや敷りがある ・図書館利用をする人以外の人は別空間で活動を行っている(合唱団はお話会の時に児童スペースで童謡を歌うため混在がある) ・利用者同士の視線を遮る構造 ・子供のお話会は密着空間	・他のサークル活動から図書館に関わり、本を読み、図書館のあり方を学び始める ・本から考え方の多様性を得て、能動的になる ・ボランティアは過去からの思いを維持したい	・高い司書比率と継続による高い専門性 ・市民ボランティアとの協働。設立時の市民メンバーが現在も在籍し、図書館への思いが強い ・本来の図書館のあるべき姿を發揮し、本や読書の推進をしたい ・図書館の場は制約があり提供はしていない	・図書館はあって当たり前の存在 ・市政との連携は現状ない ・市民の読書に対する意識が変化し、家読が認知されている	・図書館に観光客はいない ・観光で図書館に来ることは市民にとってメリットはない ・他の図書館と比較されて伊万里の良さを知る
川崎市中原図書館 (神奈川県)	直営+業務委託	・学習及び閲覧席はオープン空間であるが、年齢等によって区分けされている ・多層階であるが上階から下階フロアを見わたせる構造はない ・大人と子どものスペースを分離している	・言及なし	・カウンター業務を民間に委託しているが、官と民で業務分離のため連携が活かしきれない ・本来の図書館のあるべき姿を發揮し、本や読書の推進をしたい ・図書館の場は制約があり提供はしていない	・ボランティア団体が増加し、30代が活動に参加するようになった ・学校と協働でイベントの開催や告知 ・小中学生がファシリテーターとして子どもイベントに参加 ・活動の場を求めて学校でも読み聞かせを行う	・観光客はいない ・住宅が増加し、住民が増加している ・市民以外の住民にも利用を開放し、東京都民、横浜市民の利用者も多い
函館蔦屋書店 (北海道)	CCCによる民間のBOOK&カフェ	・全てオープン空間でありシームレス ・カフェ及び書店物販シームレス構造となっている ・吹き抜けがあり上部空間から見わたせる構造 ・箱状の空間に席は外周に沿って配置され中に向かって利用者の行動を見る構造	・志を大事にするようになった ・マネジメント職を通して自らの考えが広くなった	・コミュニティが施設、スタッフの中心 ・障害者雇用スタッフが成長し、周りから頼りにされている ・お客さんと意図的に近くなるように企画 ・新しいことを提案し続ける	・地域の変化はわからない ・イベント主催者、スタッフ、コンシェルジュに会いに来る場 ・利用者スタッフとの関係性がある ・イベント主催者と参加者の関係性がある	・観光客は心構えとしてはお断り ・メディアは自社で出版し道内でメディア露出している



### (1) 地域の図書館の変化を受容するプロセス

図書館の機能変化にはポジティブな側面だけでなく、ネガティブな側面もある。本研究でこれまで述べてきた個人の意識変容のサブプロセスとして、地域に議論を惹起する図書館の変化を受容するプロセスがある。

困難な出来事を通じた肯定的な変容には、心理学研究において、posttraumatic growth 等のさまざまな概念が援用されてきた[36]。困難な出来事を経験した人のうちの何割かは、出来事を通じて自身の強みや他者との絆の深まりなどといった恩恵を見出す現象を表し、ストレス経験を通じた成長は、困難な出来事に対する認知的反芻や意味づけ、対処行動などを通じて生じる[37]。地域図書館の変化という困難な出来事を受容するプロセスのストーリーラインを以下に示す。

図書館の変化を「地域が分裂される」と感じるほどの葛藤を感じ、司書は職場環境や「図書館のあり方が根本的に変わる」大きな変化に対して、驚き、拒絶、混乱、喪失感を感じた。当事者でありながら改修期間中においては「決める権利がない」と感じた。また、図書館利用者や歴史資料館に想いを持つ者は、子どもと利用したお話の場、子ども時代に利用した場所、常設の「歴史資料館の喪失」に対して喪失感を感じていた。図書館を利用しない人、外部の有識者、図書館関係者等「外から口を挟まれることに嫌悪」し、他と「比較される」中で、自らの「変わらない軸」を意識し「多様な図書館像」があることを認識した。改修によって「図書館の利便性が向上」し、図書館が話題になり多くの人が流入し「図書館はガヤガヤした」。これまで武雄市内でも、非利用者にとっては「図書館は見えない存在から、見える存在」となる。試行錯誤する中「対話でつなぐ」ことや「良い方向に考える意識」「あきらめと適応」を経て「変化や新

しさを受け止め>徐々に<図書館が地域に馴染む>ようになった。

改修後の図書館に対して否定的な関与者は、喪失感から変化を受容するプロセス過程で変化の受容には至らず「価値観が違う」「誇りを失う」と感じ、自己の意識変容プロセスには合致しない。

### (2) 地域が図書館であることの可能性

個人の意識変容プロセスにおいて、図書館に対する認識も変容している。以前の図書館に対しては「閉鎖的」「守られる場所」といった「シェルター」的閉じた場所であったが、「自由で選択可能な居場所」「場を使う」と開かれた場所へと認識が変わっていた。地域の居場所[38]は地域の図書館にも認識されており、参加型図書館モデルの持つ知のプラットフォームの要素[27]を地域内にもたらず可能性がある。

### (3) 変容を支える地域の存在と利他の意識

本研究では、個人の意識変容のプロセスから、地域への影響として地域に恩を返したいという利他的な意識や地域を誇りに思う意識、地域活動の広がりが見られた。このような利他性のある地域活動について、地域での共同行為における自己実現の段階モデル[15]は目的的共同性の主体的活動の意義を示し、地縁・血縁による伝統的地域団体とは異なる「弱い韌帯」による水平的ネットワークの結集が自発的なソーシャルムーブメントを進展させていることを明らかにしている[39]。そのソーシャルムーブメントの起源に必要とされる個人の意識変容や地域での境界を超えた活動、地域に対する利他的意識の発生プロセスの一端が個人の意識変容プロセスから見られる。このことは、地域活性化において従来型の行政による事業推進を通じたまちづくりのみならず、住民主体の

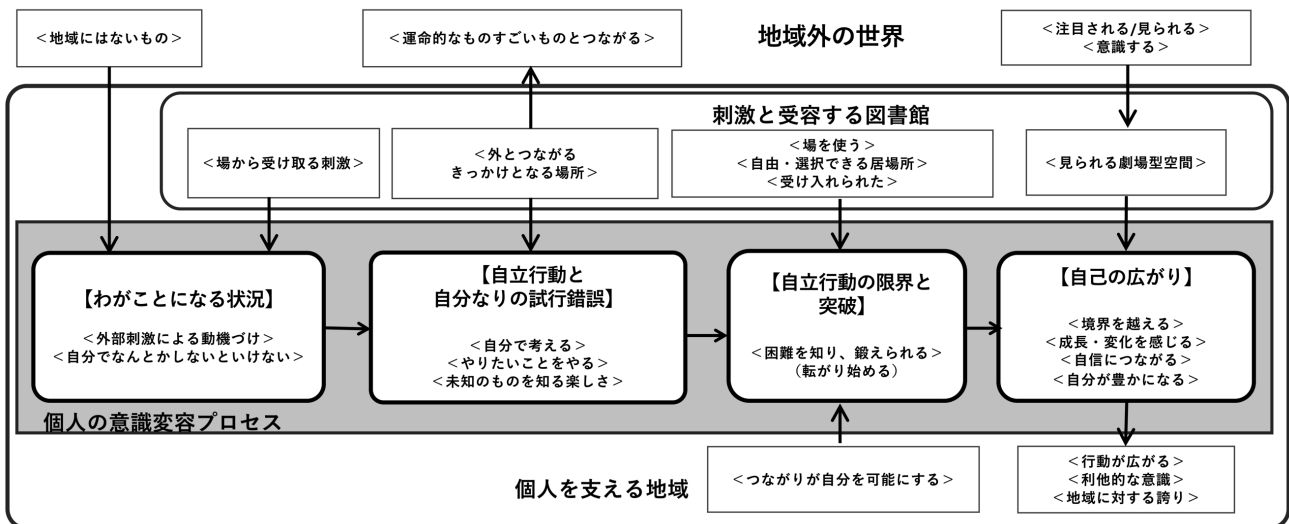


図 3 個人の意識変容のプロセス図

(出所 筆者作成)



地域づくりの重要性が指摘されている[40]現状において、地域の図書館に武雄市図書館のような部外から参加者との協働効果[41] [42]が期待できることを示唆している。

#### (4) 政策へのインプリケーション

本研究の事例では、紙資料を保管する器としての図書館が、人が集う場と変容することで関与者の意識変容と地域に対するポジティブな影響を与えていた。図書館は全国98%の市区に存在し、約三千館ある。地域の図書館が知の保存のみならず外へ場をひらき、他者視点を取り入れる知の創造的プラットフォームの“場”として積極的に活用されることで地域人材育成の可能性が開けると考えられる。また、指定管理者制度を活用した図書館運営は全国で582館といまだ少数である。もっぱらコストダウンを目的とした民間企業への業務委託ではなく、指定管理者が地域住民及び行政関係者など多様な人材と対話し、試行錯誤をしながら図書館の地域における活用を企画し協働することで地域における新たな価値創造並びに地域及び個人の成長の可能性を創出する意義があると考えられる。

#### 6. 結論

本研究では、新たな公共図書館のあり方として注目される武雄市図書館を対象に、地域の場としての図書館が場の関与者にどのような変化を起こすかフィールド調査を行い、GTAによりテキストデータの分析を行った。その結果、場としての図書館の関与者の意識変容プロセスを明らかにした。すなわち、図書館の関与者には、個人の自立行動が刺激され、試行錯誤し成長した結果として、地域活動の広がりや地域への利他的意識が醸成されていた。個人の意識変容のプロセスは4段階に分かれる。①わがこととなる状況、②自立行動と自分なりの試行錯誤、③自立行動の限界と突破、並びに④自己の広がりである。

これら個人の意識変容に対して図書館が寄与した役割は、<場から受け取る刺激>によって個人を動機付け、自立行動と試行錯誤を助ける<外とつながる場所>となるという点である。すなわち、自立行動の困難さに対し、活動の場を提供し、<自由さや選択できる居場所>を提供している。図書館が<見られる劇場型空間>になることで、個人に対し、他者に見られることによる自信を与えることになっている。

地域のつながりに支えられて、個人が意識変容し自立行動を行った結果、自己概念が広がり地域及び他者に対して利他的意識が醸成されていた。

#### 7. 今後の研究課題

本研究では、地域の場としての武雄市図書館利用者の意識変容の可視化及び構造化を行なった。その意識変容の対象範囲、継続性、他の地域での再現性並びに行政の関与のあり方を明らかにすることは今後の課題である。今後は武雄市のみならず、他の地域の場としての公共施設及びCCCによる指定管理公共施設を対象とした調査と比較を行い、実証研究を行う予定である。また、地域の個人変容に留まらず、個人が変容し地域へ影響を与えるプロセスを可視化し、定量化してゆきたい。

#### 謝辞

本稿は2019年度地域活性学会第11回研究大会で発表した内容を大幅に改訂したものである。座長的那須先生及び阿比留先生並びに参加者から有益なご示唆をいただいた。また2名の匿名の査読者から有益かつ貴重な示唆をいただいたことに謝意を表す。

#### 註

対象の現在状況は2017年の調査以降変更はない。2020年に異なるスタッフにインタビューを行い、分析結果を裏付ける内容であることを確認し、GTAが理論的飽和に至っていることを確認した。

#### 引用・参考文献

- [1] 松浦寿幸, 元橋一之, 2006, 大規模小売店の参入・退出と中心市街地の再生, RIETI Discussion Paper Series.
- [2] 文部科学省, 2008, これからの図書館の在り方検討協力者会議これまでの議論の概要, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/tosho/giron/05080301/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/giron/05080301/001.htm), 最終閲覧日: 2020年5月7日.
- [3] 西野辰哉, 2015, 先行自治体による公共施設再編計画の構成と内容に関する考察, 日本建築学会計画系論文集, 80巻714号, 1775-1785.
- [4] インフラ老朽化対策の推進に関する関係省庁連絡会議, 2013, インフラ長寿命化基本計画.
- [5] 文部科学省, 2015, 社会教育統計2015年度, <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400004&tstat=000001017254>, 最終閲覧日: 2020年5月7日.
- [6] Nonaka, I and Konno, K., 1998, The concept of “Ba”: Building a foundation for knowledge creation, California Management Review, vol.40, no.3, Spring 1998, 40-54.
- [7] 根本彰, 2013, 「場所としての図書館」再考, 現代の図書館, vol.51, no.2, 51-60.
- [8] 久野和子, 2014, 新しい批判的図書館研究としての「場としての図書館」(“Library as Place”)研究: その方法論を中心にした考察, 図書館界, 66巻4号, 268-285.
- [9] 坂倉由季子, 安部和秀, 保井俊之, 当麻哲哉, 前野隆司, 2018, システムズエンジニアリングによる地域の「場」の設計方法とその評価, 地域活性研究 vol.9, 25-34.
- [10] 坂倉杏介, 2013, 関係性のはぐくむ場所: 地域の居場所か

ら生まれる「つながり」と「活動」をめぐる、現代の図書館  
vol.51, no.2, 98-105.

[11] Strauss, A., Corbin, J., 1998, Basics of qualitative research : techniques and procedures for developing grounded theory, Thousand Oaks: SAGE Publications.

[12] 戈木クレイグヒル滋子, 2014, グラウンデッド・セオリー・アプローチ分析ワークブック, 日本看護協会出版会.

[13] 谷一文子, 2019, これからの図書館: まちとひとが豊かになるしかけ, 平凡社.

[14] 野口将輝, 伊藤直哉, 2013, 自治体における Facebook 広報に関するメディア効果検証 7: 佐賀県武雄市のソーシャルキャピタルとシビックパワーへの影響, 情報文化学会誌, 20(2), 35-42.

[15] 嶋田学, 2015, 地域活性化に寄与する公共図書館の役割, 情報の科学と技術, 65 巻 5 号, 206-211.

[16] 猪谷千香, 2014, つながる図書館: コミュニティの核をめざす試み, 筑摩書房, ちくま新書.

[17] 南学, 2015, 公民連携手法研究報告書, 4-6.

[18] 武雄市教育委員会, 平成 25 年度図書館統計,  
<https://www.city.takeo.lg.jp/kyouiku/25.html>  
最終閲覧日: 2020 年 5 月 10 日.

[19] 坂倉杏介, 保井俊, 白坂成功, 前野隆司, 2015, 「共同行為における自己実現の段階モデル」を用いた協創型地域づくり拠点の参加者の意識と行動変化の分析, 地域活性研究, No. 6, 96-105.

[20] 根本彰, 2005, 「場所としての図書館」をめぐる議論, カレントアウェアネス, No.286,21-25.

[21] Buschman J.E. and Leckie G.J. (eds.), 2006, The Library as Place: History, Community, and Culture, Westport, CT: Libraries Unlimited.

[22] Antell K. and Engel D.2006, Conduciveness to scholarship: The essence of academic library as place, College & Research Libraries 67(6),536-560.

[23] 久野和子, 2011, 「第三の場所」としての学校図書館, 図書館界, vol.63 no.4, 296-313.

[24] 岩下 雅子, 2017, 多様化する公共施設としての図書館 : 新たな公共施設を考える, かごしま生涯学習研究 : 大学と地域, vol.1,no.2, 87-91

[25] 嶋田学, 2011, 地域を活性化させる図書館活動とは : 公共図書館政策と東近江市立図書館の実践 (現場からの提言), 図書館界, 63 巻 1 号, 16-23.

[26] 遠山亮子, 野中郁次郎, 2000, 「よい場」と革新的リーダーシップ: 組織的知識創造についての試論, 一橋ビジネスレビュー, 48, 夏秋号, 1-13.

[27] Nguyen, L.C., 2015, Establishing a Participatory Library Model: A Grounded Theory Study, The Journal of Academic Librarianship, vol.41, issue 4, 475-487.

[28] 松戸広子, 2008, 特別な教育的ニーズをもつ児童生徒に関わる学校職員の図書館に対する認識の変化のプロセス: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を通して, 日本図書館情報学会誌, 54(2), 97-116.

[29] 佐藤翔, 2016, 「TSUTAYA 図書館」から考える教育機関としての図書館, Musa : 博物館学芸員課程年報 (30), 21-30.

[30] 大谷卓史, 2016, 過去からのメディア論: 過去から TSUTAYA 図書館を眺める, 情報管理 58 巻 10 号, 782-786.

[31] 桑原芳哉, 2015, 公立図書館における指定管理者制度導入の実態, 尚絅大学研究紀要 A.人文・社会科学編 vol.47(0), 15-27.

[32] 楓森博, 加藤勇夫, 越島一郎, 2015, 社会価値実現のための P2M フレームワークの考察, 国際 P2M 学会誌 10 巻 2

号,179-192.

- [33] 戈木クレイグヒル滋子, 2008, 実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ, 新曜社, 10.
- [34] 茅明子, 2014, 復興感に差をもたらす「地域の力」の構造化: 三宅島と島原を事例にグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析, 地域活性研究, vol.5, 91-100.
- [35] 中井孝幸, 2013, 利用行動からみた「場」としての図書館に求められる建築的な役割, 情報の科学と技術 63 巻 6 号, 228-234.
- [36] Tedeschi, 2011, Posttraumatic growth in combat veterans, J Clin Psychol Med Settings,18(2),137-44.
- [37] 飯村周平, 2016, 心的外傷後成長の考え方: 人生の危機とポジティブな心理的変容, ストレスマネジメント研究, vol. 12(1), 54-65.
- [38] 坂倉杏介, 保井俊之, 白坂成功, 前野隆司, 2013, 「共同行為における自己実現の段階モデル」による「地域の居場所」の来場者の行動分析 東京都港区「芝の家」を事例に, 地域活性研究, No. 4, 23-30.
- [39] 保井俊之, 坂倉杏介, 林亮太郎, 前野隆司, 2016, DSM と CMM を用いた地域活動のつながり可視化・構造化モデルの提案, 地域活性研究, No. 7, 20-29.
- [40] 叶好秋, 樂木章子, 杉万俊夫, 2018, 政策の立案・実行過程における住民参加の新しい試み: 鳥取県智頭町「百人委員会」, 集団力学, 35 巻, 3-83.
- [41] 敷田麻実, 2005, よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究, 江淳の久爾 (50), 74-85.
- [42] 敷田麻実, 2009, よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究, 国際広報メディア・観光学ジャーナル, vol.9, 79-100.

#### Abstract (英文)

This study is to visualize and model that the local public libraries bring changes to the users through the “ba”. For the field of analysis, we selected the Takeo City Library in Saga Prefecture, which is the first full-scale library in Japan as a place in the community and analyzed it by using the Grounded Theory Approach (GTA). This study showed that library users were encouraged to act independently by external stimuli, and experienced trial and error to experience growth, and the change in consciousness that fosters altruistic consciousness in the spread of activities. The process is inferred into four categories: self-help situations, self-sustaining behavior and trial and error of one's own, limits and breakthroughs of self-sustaining behavior, and extent of self. In addition, the function of the library as “ba” is proven to motivate individuals by external stimulation, provide a place to connect with the external environments, provide a place of activity, freedom and a place to choose, and provide a mental theater-space that can be appreciated by the others.